

## 平成25年度 食品の安全性に関する有害化学物質の サーベイランス・モニタリング年次計画の実施状況

### (サーベイランス)

危害要因 カテゴリー	危害要因	調査の趣旨	具体的な 調査対象品目	計画	実績	備考
重金属等	ヒ素	国内の水田土壌及びコメ中のヒ素の含有実態及びその関連性を把握(予備調査)	土壌	○	○	
			玄米	○	○	
	カドミウム	昨年度実施した小麦、大豆中の含有実態調査に引き続き、農作物における含有実態を把握	小麦	○	○	
			大豆	○	○	
		国内主要産地で生産されたにんじん、にんにく及びたまねぎについて主要品種間のカドミウム吸収能の差異を評価	にんじん、にんにく、たまねぎ	—	○	・研究事業の成果を補強するために実施。
	鉛	加工食品等に含まれる鉛について、感度の高い分析法で含有実態を把握し、国内のリスク管理の必要性について検討(予備調査)	果実及び果実加工品、菓子類、乳幼児用食品、乳製品など、子供が食べる機会、頻度が高い食品を中心に選定	○	○	・果実及び果実加工品、調製粉乳、乳、乳製品を調査。 ・鉛と併せて、カドミウム、総水銀、総ヒ素を分析。

危害要因 カテゴリー	危害要因	調査の趣旨	具体的な 調査対象品目	計画	実績	備考
ダイオキシン類	ダイオキシン類(コプラナーPCBを含む)	排出抑制対策に伴うダイオキシン類濃度の経年変化を調査し、リスク管理措置の効果を把握	葉菜類	○	○	
			タチウオ	○	○	
			ホッケ			
			ブリ(天然)			
			ブリ(養殖)	○	○	
		動物性油脂				
		魚油				
魚粉等						
かび毒	デオキシニバレノール(DON)及びアセチル体(3-アセチルDON、15-アセチルDON)	リスク管理措置の有効性を検証するため、国産麦類における全国的な含有実態及び年次変動を把握 DONとアセチル体との含有濃度の相関も確認	小麦	○	○	
	大麦					
	ニバレノール(NIV)及びアセチル体(4-アセチルNIV)	リスク管理措置の有効性を検証するため、国産麦類における全国的な含有実態及び年次変動を把握 NIVとアセチル体との含有濃度の相関も確認	小麦	○	○	
	大麦					
	T-2トキシン及びHT-2トキシン	国産麦類における全国的な含有実態及び年次変動を把握	小麦	○	○	
			大麦			
	ゼアラレノン	国産麦類における全国的な含有実態及び年次変動を把握	小麦	○	○	
			大麦			
	フモニシン	飼料への基準値設定の必要性を検討するため、飼料用とうもろこし等における含有実態を把握	配合飼料	○	○	
			主要穀類等			

危害要因 カテゴリー	危害要因	調査の趣旨	具体的な 調査対象品目	計画	実績	備考
食品製造由来有機汚染物質	アクリルアミド	主要品目について、事業者による自主的な低減の取組の状況等を確認するため、最新の含有実態を把握	フライドポテト、ポテトスナック、パン類、含みつ糖	○	○	
	アクリルアミド前駆体等 (遊離アスパラギン、還元糖、たんぱく質)	事業者・消費者への情報提供のため、穀粉を対象としたアクリルアミド前駆体の含有実態を把握(予備調査)	穀粉	—	○	・アクリルアミド低減の取組を支援するために必要な基礎データの取得。
	3-MCPD脂肪酸エステル	昨年度実施した食用油脂の予備調査において、比較的含有濃度が高いものを対象に、ロット間のばらつき等を含めて追加の実態調査を実施	食用油脂 (予備調査) 乳幼児用調製乳、魚油、マーガリン類、ショートニング、バター、油脂を主成分とする健康食品	○	○	
	グリシドール脂肪酸エステル	また、国内で実態調査が行われていない食品のうち、油脂含有量の多い食品を対象に含有実態を把握(予備調査)		○	○	
	多環芳香族炭化水素 (PAH)	直火調理を行う食品事業者に対して調理法に関する注意喚起や助言の必要性を検討するため、実態調査を実施	地鶏炭火焼き、焼き鳥、直火焼き畜肉製品等	—	○	・平成26年度に予定している低減技術に関する研究事業の基礎データとしても活用。
残留性有機汚染物質	ポリブロモジフェニルエーテル(PBDE)	日本人の平均的なPBDE摂取量の推定(トータルダイエツスタディ)	13食品群(穀類、豆類、種実類、野菜類、果実類、藻類、魚介類、肉類、卵類、乳類、油脂類、菓子類、調味料・香辛料類)	○	○	
	パーフルオロオクタン酸(PFOA)及びパーフルオロオクタンスルホン酸(PFOS)	日本人の平均的なPFOS、PFOA摂取量の推定(トータルダイエツスタディ)		○	○	

(化学物質分析法 妥当性等確認)

危害要因 カテゴリー	危害要因	調査の趣旨	具体的な 調査対象品目	計画	実績	備考
重金属等	ヒ素	サーベイランスで使用する土壌中ヒ素の分析法の妥当性確認試験を実施	土壌	○	—	・水田土壌及び同水田で生産されたコメの含有実態調査(サーベイランス)を優先。
		欧州で開発された分析法と我が国の室間共同試験で妥当性確認された分析法を比較	米(コメ粉末試料)	—	○	・異なる分析法を用いた場合の結果の一致の程度に関する情報は重要。 ・国際基準と併せて議論される予定の分析法の検討にも貢献。
自然毒 (海産毒)	下痢性貝毒	機器分析導入の検討に資するよう、機器分析法及びマウス試験法を用いた比較試験を行い、これら分析法の相関関係を確認	ホタテガイ、ムラサキイガイ、イガイ等	○	○	
	麻痺性貝毒	機器分析導入の検討に資するよう、機器分析法の妥当性確認試験(単一試験室)を行った上で、機器分析法及びマウス試験法を用いた比較試験を行い、これら分析法の相関関係を確認	ホタテガイ、ムラサキイガイ、イガイ等	○	○	

(モニタリング)

危害要因 カテゴリ	危害要因	調査の趣旨	具体的な 調査対象品目	計画	実績	備考
重金属等	カドミウム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飼料中の残留基準値への適合を確認するため実施</li> <li>・モニタリングの結果は、残留基準値の見直しに活用</li> </ul>	配合飼料	○	○	
			乾牧草			
			動物性飼料(魚粉、肉骨粉等)			
	総水銀	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飼料中の残留基準値への適合を確認するため実施</li> <li>・モニタリングの結果は、残留基準値の見直しに活用</li> </ul>	配合飼料	○	○	
			乾牧草			
			動物性飼料(魚粉、肉骨粉等)			
	鉛	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飼料中の残留基準値への適合を確認するため実施</li> <li>・モニタリングの結果は、残留基準値の見直しに活用</li> </ul>	配合飼料	○	○	
			乾牧草			
			動物性飼料(魚粉、肉骨粉等)			
かび毒	ゼアラレノン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飼料中の残留基準値への適合を確認するため実施</li> <li>・モニタリングの結果は、残留基準値の見直しに活用</li> </ul>	配合飼料	○	○	
			主要穀類等			
	デオキシニバレノール	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飼料中の残留基準値への適合を確認するため実施</li> <li>・モニタリングの結果は、残留基準値の見直しに活用</li> </ul>	配合飼料	○	○	
			主要穀類等			

平成25年度 食品の安全性に関する有害微生物の  
サーベイランス・モニタリング年次計画の実施状況

(サーベイランス)

危害要因	調査の趣旨	具体的な調査対象品目	計画	実績	備考
カンピロバクター	肉用牛の汚染実態の把握	糞便	○	—	・肉用牛における腸管出血性大腸菌の調査を優先。
	食鳥処理施設における交叉汚染の実態と汚染ルートの解明	部分肉(もも、胸、肝)、体表付着物、腸管内容物	○	○	
	豚の汚染実態の把握	糞便	○	○	
サルモネラ	肉用牛の汚染実態の把握	糞便	○	—	・肉用牛における腸管出血性大腸菌の調査を優先。
	食鳥処理施設における交叉汚染の実態と汚染ルートの解明	部分肉(もも、胸、肝)、体表付着物、腸管内容物	○	○	
	採卵鶏農場における汚染実態と汚染ルートの解明	糞便、鶏卵、塵埃	○	—	・レギュラトリーサイエンス新技術開発事業の中での同様の調査で代替。
	豚の汚染実態の把握	糞便	○	○	
腸管出血性大腸菌	肉用牛の汚染実態の把握	糞便	○	○	・糞便に加え、体表及び十二指腸内容物を調査。
	野菜の衛生管理指針の導入効果の検証	・生食用野菜 ・土壌、用水	○	○	
	野菜加工施設における衛生上の管理点の明確化及び衛生管理手法の現場における実証(予備調査)	加工野菜(野菜加工施設)	○	○	・衛生指標菌等を調査。

危害要因	調査の趣旨	具体的な調査対象品目	計画	実績	備考
リステリア・モノサイトジェネス	肉用牛の汚染実態の把握	糞便	○	—	・肉用牛における腸管出血性大腸菌の調査を優先。
	食鳥処理施設における交叉汚染の実態と汚染ルートの解明	部分肉(もも、胸、肝)、体表付着物、腸管内容物	○	○	
	豚の汚染実態の把握	糞便	○	—	・豚におけるE型肝炎ウイルスの調査を優先。
真菌	米のカビ汚染防止のための管理ガイドラインの効果の検証、米の乾燥調製施設等に存在する真菌(アフラトキシン産生菌を含む)の実態を把握	塵埃 (米の乾燥調製施設等)	○	○	
ノロウイルス	平成26年度以降の二枚貝における汚染実態調査計画の検討に活用(予備調査)	二枚貝(カキ、ムラサキイガイ)	—	○	・平成25年2月のリスク管理検討会で、「実施すべき」との御意見をいただいた調査。 ・A型肝炎ウイルス、E型肝炎ウイルス及びサポウイルスの検査も実施。 (ノロウイルスと同様に河川を通じて海域を汚染する可能性。また、ノロウイルス検査と同一検体で類似の検査法を用いて検査可能。)
E型肝炎ウイルス	豚の汚染実態の把握(予備調査)	糞便	—	○	・2012年(平成24年)以降、国内のE型肝炎患者年間報告数が100名を超えており(2011年以前と比較して約2倍)、一部の原因食品として豚肉が推定。  ・黄色ブドウ球菌の検査も実施。(海外の一部の国では、特定の遺伝子型の黄色ブドウ球菌が豚に定着していると報告。)